



[講演]

# キャンパスを“協創”の場に！ 日本語教育センターは大学の 国際化のために何ができるのか

日本語教育センター長、  
異文化コミュニケーション学部教授  
池田 伸子 氏

○鹿目 それでは時間になりましたので、最後の講演に移ります。最後は異文化コミュニケーション学部教授、日本語教育センター長、池田伸子先生です。タイトルは、「キャンパスを共創の場に 日本語教育センターは大学の国際化のために何ができるのか」です。池田先生、よろしくお願ひいたします。

○池田 お待たせいたしました。「キャンパスを共創の場に 日本語教育センターは大学の国際化のために何ができるのか」。日本語教育センターで、日本語教育センター長を今年度から務めております池田と申します。前半、松井先生から立教大学がどういうグローバル人材、これからの21世紀を担っていく人材を育成しようとしているのかというお話を伺いました。その後、日本語教育センターの取組について丸山先生からご紹介いただき、日本語教育センターの様々な活動を通して、学生たちがどのような学びを得てきたのかということをご紹介いただきました。

それを受ける形で、私からは、今後、日本語教育センターという組織が、さらに、より一層、立教大学というこの場を国際化、それから国際化よりももっと大切な、21世紀に日本を、それから世界を支えていくことができる人材育成にどう貢献していけるのかということについてお話をしていきたいと思ひます。【スライド⑥-1】

まず、ここは、ご来場の皆さんはよくご存じのことだと思ひますので、短くお話をします。大学の社会的使命の1つについてです。これが全てだとは申し上げませんが、大学の社会的使命の1つは、これからの世界、それから日本を支える人材を育てることです。そして、私の理解では、そういう人物が立教大学

版のグローバル・リーダーだと思っています。そしてその上で、大学という組織、大きな組織の中に位置づけられている日本語教育組織の使命というのは、大学が育てようとしている人材の育成、それからキャンパスの国際化に日本語教育組織、つまり私たち日本語教育センターだからできることによって貢献をしていくことだと思っています。それが言い換えれば、小さくはなりますが、日本語教育センター版のグローバル・リーダーの育成だと思っています。

この下の図を見ていただきますと、かわいい手を広げているものが、大学が育成するグローバル人材像だとすると、それは、大学の個々の組織の力が集結して具現化されるものだという事です。この小さいジグソーパズルのピースは学部であり、研究科であり、それからボランティアセンターであり、様々な教育、それから課外活動に関わっているセンターであり、そして事務組織でもあると認識しています。それが集結をしたときに、初めて立教大学が目指すグローバル人材というのが具現化されて、育成されて、社会に出ていくと考えています。

この右下のちっちゃいピース、これが日本語教育センターであり、日本語教育センターも微力ながら、この立教大学の人材育成、グローバル人材育成に力を注いでいるという、これが大学という組織の中の日本語教育組織が持っている使命であり、果たすべき役割だというふうに思っています。**【スライド⑥-2】**

では、大学の中の日本語教育組織というのが、どういうものなのか。ここに来ていらっしゃる先生方は、言われるまでもなくご存じだと思いますが、多くの人たちが認識している、あるいは私たちの多くも、それが役割であると認知しているのは、留学生を対象にした日本語科目、それを開発していくこと、運営をしていくこと。そして、それに伴う様々な課外活動、例えばスピーチコンテストであったり、それから学習支援という形の日本語相談室の運営であったり、それから漢字検定、これは学習動機づけですね。そういうことを担っていくのが日本語教育センターであり、その結果として求められるアウトカムという言葉を使うとすれば、日本語教育センターの授業に参加をした留学生の日本語力が向上すること。それから日本、それから日本文化、日本の社会、日本に関する知識を得ていくこと、情報を得ていくこと。そして大学という組織の中にある組織である以上、日本への着地であるとか、その所属している大学への着地、これも日本語教育を担う組織に求められるアウトカムだろうと思っています。

しかし立教大学の日本語教育センターは、今お話ししたような日本語教育組織

に期待されるアウトカムの達成だけを指すのではなく、開設当初から、日本人学生や、日本語力が高い留学生を日本語教育センターの活動に参加をさせるという取組をいろいろとつくってきました。そこで留学生と日本人学生と一緒に同じ経験をする、実体験をする。様々な共通のゴールを共有しながら活動していくという仕組みをつくってきました。これは別に立教大学の日本語教育センターだけが先進的にやっている取組ではなくて、日本の国内の多くの日本語教育に携わる組織はこういう取組を続けてきていると認識しています。

しかしながら、当初この取組が日本語教育組織の中で行われたときには、日本語教育センターの教員の意識としては、日本人学生を取り込んでいくことによって、留学生の日本語力がよりアップしたり、それから日本についての学びが深まったり、あるいは立教大学という場所に対する着地、それがもっと促進されていくだろうという、いわゆる留学生にとっての学びを促進するという目的があったと思われますし、日本人学生、参加をしてくれる日本人学生にとっては、留学に行かないから、その代替としてとか、異文化間能力を、あるいは異文化コミュニケーションの機会をとというふうに捉えられることが多かったと思います。あるいはもしかすると、これは今でも多いのかもしれませんが。**【スライド⑥-3】**

ただし私が今日、お話しをしたいのは、今日登壇してくれた学生さんたち、すごく短い時間だったのですがとてもいいお話をしてくださいました。これから立教大学の日本語教育センターが大切に拾っていきたいと思っているのは、そういう活動に参加してくれた学生が何を感じたのか。違和感、疑問、驚き、楽しい、うれしい、悔しい、大変、面倒くさい、どんな感情でもいいんですけど、感じたこと、それから悩んだこと、どうして？あるはどうしたら、そこを拾っていききたい。何というんでしょう、どのくらい高い意識を持って日本語教育センターの活動に参加をするかによって、この感じるというところで活動を終えて出ていく学生と、そこからさらに一歩踏み込んで、気づき、考え、それから聞き、ほかの人の聞き、調べ、試すという、そこまで行く学生に分かれてくるとは思うんですけど、その感じるところだけで活動を終えた学生も、その先に進んだ学生も、単に異文化間能力という言葉で片づけられない何かをこの活動を通して得ているのではないかと考えています。

それが、ひいては大学が育てようとしているグローバル人材であるとか、21世紀を担っていく人材になるのではないかと。全部になるとは思いませんが、日本

語教育センター版のグローバル人材像というのを考えるときに、ここはすごく大事なのではないかと考えています。そこで私がというか、私たち日本語教育センターが目指したいものというのが、共創という言葉です。Collaborative Creativity、英語にするとあまりなじみがない言葉なのではないかと思います。

なぜ共創なのかというと、共学、つまりともに学ぶ、これだとすごくイメージが静的、つまり動きがない。単に物理的に同じ場所にいろいろな人がいるだけ。これじゃやっぱり駄目だし、共同というのは、等しく、この共同という字ですね。等しく対等な立場で一緒にやりましょうというイメージはありますが、やっぱりこれでもなかなか弱い。最近よく使われる協働ですけど、これはやっぱり同じゴールを見るところという要件が加わってきます。つまりそこにいる人たちが同じゴールを見て、その同じゴールを目指すことによって何かを得ていく、これが協働。だけど日本語教育センター、立教大学の日本語教育センターは、常に最先端を目指しますので、その先を見たいというふうに思っています。

さらに言うと、その理由としては、ダイバーシティ、インクルージョン、これ、よく聞く言葉です。その先に来るのが、大体イノベーションです。日本語教育を担う組織にいて、ずっとこの国際化を見てきていて、ダイバーシティ、インクルージョン、イノベーションなのかと最近思うことが多々あって、それも含めて、今日お話をできればと思っています。

さらに日本語教育を担っている組織、留学生とともに学んでいる組織でよく耳にする言葉に多文化共修とか、国際共修という言葉があります。この多文化共修、国際共修というのは、異なる背景、異なる文化、異なる言語を持つ人が、やっぱり同じゴールを目指して、ともに力を合わせて何かをしていくことを通して様々な学びを得ていくということで、主に内なる国際化、いわゆる外に大学から留学に出ていくことが外なる国際化、だけど日本の現状の中で、外なる国際化だけを目指すというのは、もう絶対無理なので、じゃあキャンパスの中の内なる国際化、これをどうやって進めていきたいと思いますかというコンテキストで、じゃあ、留学生と日本人学生を共に学ばせていくことで、多文化共修、国際共修、これをやれば留学と同じような効果が得られるんじゃないかというコンテキストです。

そこでは共通のゴール、それから共に取り組むタスク、様々なプロジェクト、協力してゴールに向かいます。様々な研究がこの多文化共修、国際共修では発表されていますが、みんなコミュニケーション能力、コミュニケーションスキル、

異文化間能力、そういうものがこういう活動を通して身についたという結果が出されています。これはすごく素晴らしいことだと思うのですが、やっぱり最先端を目指す立教大学の日本語教育センターとしては、その先に行きたい。どういふうに先なのかというと、この多文化共修や国際共修のコンテクストでは文化的多様性をしばしば学習リソースとしてとらえます。つまり異なる背景の人たち、文化的背景を学習リソースとして、それをリソースとして学生が学んでいくんだというスキームが結構強調される。それから学習成果としての異文化理解、それから異文化間能力、これが必ずといっていいほど出てくる。つまりそれが目指されるものになっている。

さらに内なる国際化ですから、海外プログラムの代替として、国内、キャンパス内でも取り組める活動として多文化共修、国際共修が位置づけられたり、そういうことがあるので、そういうことをしない、文化的多様性を学習リソースとして強調しない、それから学習成果としての異文化理解、異文化間能力をことさら目指さない。海外プログラムの代替として位置づけない。そして共創というのを学生のマインドセットと捉える。考え方ですね。考え方。それから行動に焦点を当てたいというところですよ。

そこで私たちが今日伝えたいのが、この「創」という漢字です。クリエイティブティ、創造力とか、創造性とか、創造、創っていく力というふうの意味づけられています。この創るといって、新しい何かをつくり出していく。つまりさっきイノベーションというふうに申し上げましたけど、イノベティブな、何というんでしょう、考え方とか、イノベティブな意見、イノベーションが必要だというふうに捉えられることが多い。けれども、私たちはこれを自分をつくる、それから文化をつくる、空気をつくる、そういうところの創というふうに捉えたいと考えています。

自分をつくるというのは、先ほど異文化間能力と異文化理解を、結構共通の同じ尺度で測られることがあるんですが、日本語教育センターが知りたいのは、参加してくれた一人一人の学生が、どう違う自分をつくっていくのかということ。それから一人一人の学生がどう違う空気をつくっていくのか。どう違う文化をつくっていくのか、そこが知りたい。だけど、すごくネガティブな文化をつくったり空気をつくったりされると困るので、そういうネガティブな文化や空気をつくらぬ形で学習をデザインしたい。そうすることで、一人一人つくる自分は違う

し、つくっていく空気は違うけれども、その結果として共創のマインドセットが頭の中に、心の中に埋め込まれると、そういう人たちが集まって 21 世紀の日本、世界をつくっていけるのではないかと考えるということです。

もう一度申し上げたいのは、日本語教育センターがつくろうとしている共創は、スキルではないということです。例えば異文化間コミュニケーション能力とか、異文化間能力という、どうしてもスキルと結びつけられる。言語のスキル、コミュニケーションスキル、スキルと結びつけられるんですけど、日本語教育センターとしてはマインドセット、構えを参加してくれた学生の頭の中にどう植えていくかということを目指したいと思っています。【スライド⑥-4】

もう一つ、文化をつくるというのがどうということかと申し上げたいと思います。社会を変えるというスキーム、コンテキストも国際化の中でよく使われるフレーズですが、さっきのイノベーションとも共通するのですが、グローバル人材というと、すごく、英語だけじゃなくてもいいんですけど、何かの語学がすごくできて、バリバリと他者とコミュニケーションができて、そのスキルを持って、その力を持って、社会を変えていく、世界を変えていくというようなイメージが多少あるかなと思っています。もちろん、そういうリーダーをつくることも必要。でも立教大学、例えば立教大学の全体の学生を考えたときに、全員がそうである必要は全然ない。一人一人が社会の中で求められる役割があるし、発揮できる能力も違う。なので、日本語教育センターとしては、社会を変えるではなくて、「文化をつくる」を合言葉に、立教大学のグローバル人材育成に寄与したいということです。

この丸い円の中に入っているのが日本語教育センターの様々な活動、正課であったり、正課外、それに関わってくれる学生たちとさせていただければと思います。そこで自分をつくる、それから文化、空気をつくるということ。文化、空気をつくって、自分のやり方で発信する。この発信というの、自分のやり方でいいということです。言葉を使うだけが発信ではありません。言葉を使わなくても他人に影響を与えることはできます。言葉を使うのが得意な人は使えばいい。でも違う自分なりの発信の仕方、自分なりの周囲への影響の仕方、それに気づいて、それを行動に移していける、そういう力をこの日本語教育センターの活動を通じて身につけてほしいと思っています。

それを身につけると、このカラフルな猫のように、共創のマインドセットを持

った学生というのが誕生するわけですが、この学生、例えば日本語教育センターの活動を通り抜けて、こういうマインドセットを持った学生が生まれますという、みんな日本語教育センターの活動を通り抜けないと、この共創のマインドセットを持った学生にならないということになっちゃうんですが、そうじゃなくて、自分がつくれて、文化や空気をつくれて、自分なりの周囲への影響の仕方というもの学んだ学生は、じわじわ他のところにその輪を広げていけばいいと思っています。この頭の上についているのは共創の葉っぱなんですけど、共創のマインドセットを持った学生というのはいろいろです。例えば異文化間コミュニケーション能力というと、何点とか、高いとか、低いというふうに測られてしまいます。どの程度ポイントが伸びたのか、伸びてないのか。そうじゃなくて、自分の中の共創、それを持った学生がいろいろなところに育っていく。そこからまたその芽を、種を広げていくという形を描きたいと思っています。つまり社会を変えるんじゃない、じわじわ、じわじわ、こういう頭に葉っぱをつけた学生が広がっていくことで、社会が変わればいいと思いたいということです。【スライド⑥-5】

よく黄金の3割とか、クリティカルマスという言葉が使われます。例えば職場などで男女比を見る場合、ちゃんと平等に意見を戦わせるためには3割の数、女性が、マイノリティが3割に達する必要があると言いますが、その後の研究では、本当に少しでも、じわじわと時間をかけて、しっかりと取組を続けていけば、すごく少ないパーセントでも社会が変わっていく可能性があるという研究も出ています。なので日本語教育センターとしては、この日本語教育センターという小さな組織の取組ですけど、そこからじわじわと、まずは立教大学を、そして卒業生が社会を、豊島区を、そして東京を、そして関東をというふうに、じわじわ、じわじわ、変えていく。変わっていく。というような道を目指したいと思っています。

そしてその取組をしっかりと進めていくための仕組みとして、午前中に丸山先生にご紹介いただきました日本語相談室の学生アドバイザー、これが今年度からスタートしています。しっかりと事前学習、それから事後学習、そして中間報告、毎回毎回、学生と、それから日本語教育センターの教員が関わりながら進めていく活動になっていますし、日本語能力がN3の学生、9月から日本にやってきます。その学生と一体的に学ぶ、全学部生を対象とした全カリの多彩な学び、そこでは、今お話しをした実践を行っていきたいと思っています。

そしてそういう活動の中で、どのように共創を芽生えさせていくのかということ、これは本当に、皆さんそんなこと知ってるよと思われるようなことです。自分ごととして考えさせる。つまり考えさせるというのも、いわゆる社会の問題として考えさせるんじゃないくて、自分ごととして考えさせる。それからとまどい、誤解を経験させる。それから人と人がつながっていく仕組みをつくる。これは学外も視野に入れていきます。それから、「私にもできる」と感じさせたい。つまり他人ごとじゃなくて自分ごと。自分でもできると感じさせる仕組みをつくりたい。人と関わる中で、学生の感情を動かしたい。つまりどのくらい認知的、知的なところを学んだのかではなくて、感情を動かしたい。感情を動かすことで、「あるべき」という頭でっかちから、「ありたい」を引き出したい。さらに大学の外とのつながりを、こういう活動を通じてつくりたい。

さらにこれから、難しいですが取り組んでいきたいのは、どう評価していくかということです。自分をつくる、文化をつくる、2つの側面があると思っています。自分をつくるという側面は、個々の学生をつくるをどう評価していくかという点。つまり一律の物差しで測らない評価ということです。もう一つの文化を創る。ここは他社への影響力を測っていきたいと思っています。これも一般的なものではなくて、長期的に、あるいは学生の内側から将来の行動を予測できるようなスキームがつかれないかと思っています。多様な学生の多様化する見える化し、教室外、卒業後の行動が見える化する。そうすることによって、この評価というのが生きてくるとと思っています。

さらにこの活動の評価としては、単に学生がどの程度伸びたのかということの評価するだけではなくて、暗示をかけるための評価もやりたい。つまり私にもできるというふうを感じさせることの大切さ。つまり学生に、あなたはできるという暗示をかけていく。そういう仕組みも、この活動を通して作っていけないかと感じています。

このNEXUSとの学び、それから日本語相談室での取り組みについては、来年度の日本語教育センターのシンポジウムで、より具体的に皆さんに、何ができたのかということをお伝えできればと思っています。【スライド⑥-6】

最後にですが、日本語教育センターが目指したいことです。教育というのは何かを詰め込む、情報を与えるということじゃない。これは別に放火をしるということじゃなくて、学生の心に火をつけなさいということ。さらにウィリアム・オ



一サーのほうは、普通の先生は言って聞かせる。こうするのがいいんだよ。けどいい先生は説明してくれる。どうしてそうなの。それよりいい先生は自分でやってみせてくれる。だけど最も素晴らしい先生は、やっぱりここでも学生の心に火をつけること、つまり学生の心を動かすこと、これを目指して、今後、日本語教育センターは歩んでいきたいと思っています。【スライド⑥-7】

以上でございます。ありがとうございました。

○鹿目 池田先生、ありがとうございました。

またご登壇者の皆様、ご講演をありがとうございました。

【スライド⑥-1】

## キャンパスを“協創”の場に！

日本語教育センターは大学の国際化のために何ができるのか



立教大学  
日本語教育センター  
池田 伸子

【スライド⑥-2】

## 大学の社会的使命 (の1つ)

これからの世界、そして日本を支える、創る人材を育てること。

⇒立教大学版 グローバル・リーダー

## 大学の日本語教育組織の使命

大学の人材育成・国際化に日本語教育組織だからできることによって貢献すること

⇒立教大学日本語教育センター版 グローバル・リーダーの育成

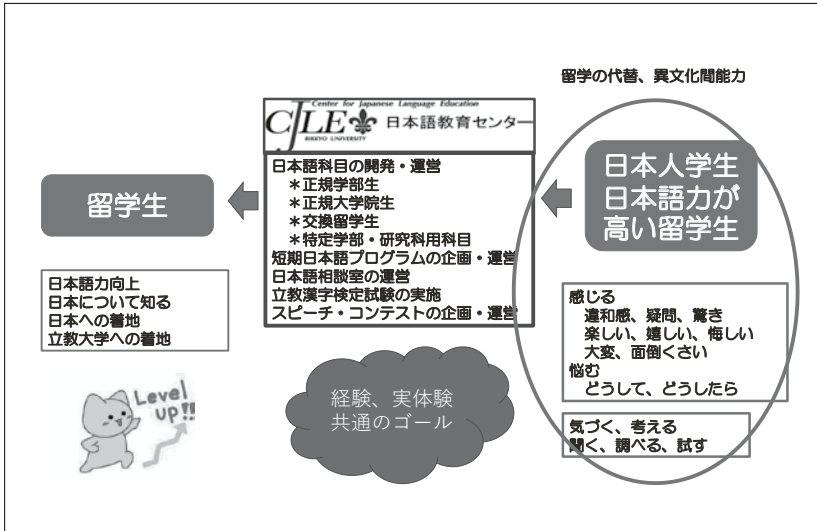


← 日本語教育センター

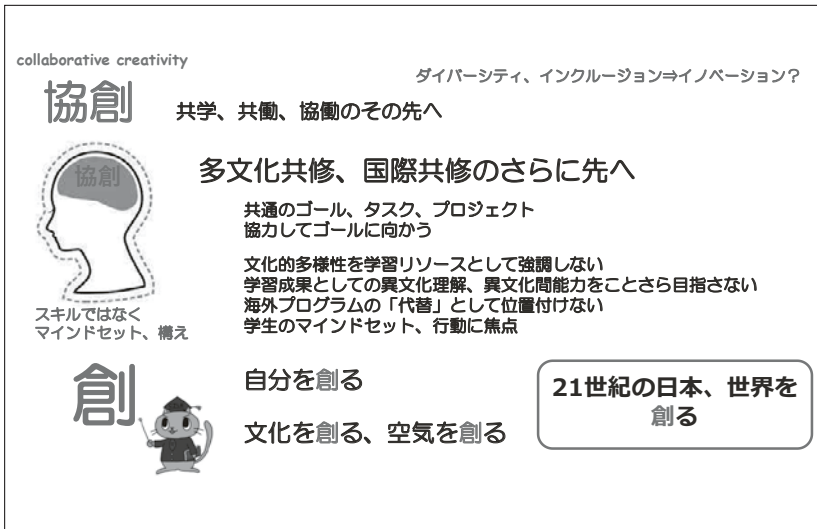
大学の個々の組織の力が集結！！  
⇒立教大学版 グローバル・リーダー



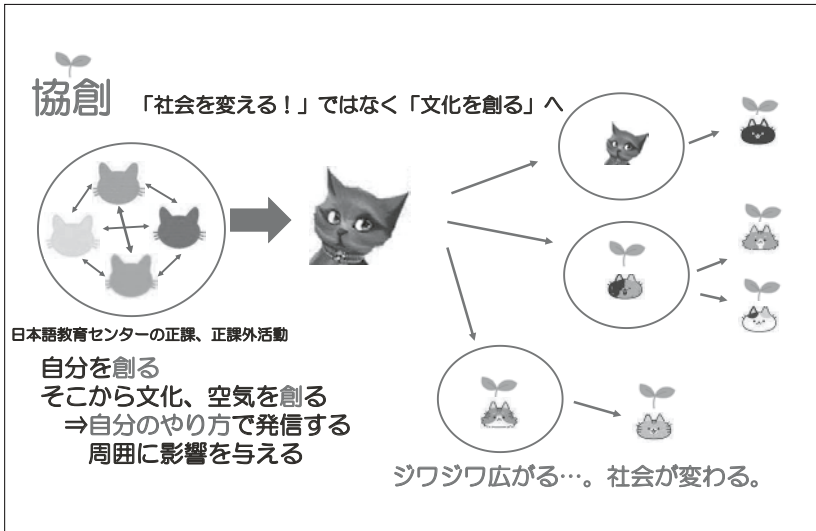
【スライド⑥-3】



【スライド⑥-4】



【スライド⑥-5】



【スライド⑥-6】

## これからの日本語教育センター

新たな協創を芽生えさせる場  
日本語相談室：学生アドバイザー（正課外）

NEXUSの学生と一体的に学ぶ全学部生に開かれた科目（正課）

どのように協創を芽生えさせるか

- \*自分ごととして考え、悩ませる仕組み
- \*戸惑い、誤解を経験から理解する仕組み
- \*人と人がつながっていく仕組み
- \*私にもできると感じさせる仕組み

人と関わる中で、学生の「感情」を動かす  
「あるべき」ではなく「ありたい」を引き出す  
大学と「外」とのつながりをつくる

**創**をどう評価していくか

- \*自分を「創る」：個々の学生の「創」を評価する
- \*文化を「創る」：他者への影響力をどう評価するか

多様な学生の多様な「創」を見える化  
教室外、卒業後の行動を見える化

暗示をかけるための評価  
行動を予測するための評価

【スライド⑥-7】

Education is not the filling of a pail,  
but the lighting of a fire.

(William Butler Yeats)

The mediocre teacher tells.  
The good teacher explains.  
The superior teacher demonstrates.  
The great teacher inspires.

(William Arthur Ward)



【スライド⑥-8】

